

# 『浮雲』の中絶の問題をめぐる

——〈意〉と〈形〉の狭間で——

鄭 炳 浩

## 一 はじめに

明治二十年代前後に、二葉亭四迷は、近代的文学論である、「小説総論」の執筆、多数のロシア文学評論や作品の翻訳など多様な文学的活動を行っていたにもかかわらず、なぜみずからの理論を実践すべく創作を開始した『浮雲』という処女作を中絶せねばならなかったのであろうか。『浮雲』中絶そのものが日本近代小説の嚆矢とされる作品の中絶であるがゆえに、この中絶の理由を解き明かすことは、二葉亭の研究史の中で核心的な問題の一つとして議論されてきた。『浮雲』中絶に関するこれまでの論考は「構想論、作家論、作中人物論、文体論」といった、多岐にわたる問題提起がなされると同時に、それぞれの立場にもとづいて中絶の理由が追究されてきた。

だが、いずれの先行論も、『くち葉集 ひとかごめ』における最初の構想からみれば、中絶の直接的な契機になったともいえる『浮雲』第三篇がもつ〈独自の意味〉を十分に考慮していないように見受けられる。『浮雲』第三篇が〈当初の構想の破綻〉という立場から論を進めてはいても、その当初の構想が破綻し

た個所そのものもつ独自ともいふべき意味性や構想破綻の必然性に関して、掘り下げた追究はなされていないと考えられる。それゆえ、『浮雲』第三篇における主人公文三を「二葉亭の歪みと動揺の象徴<sup>2)</sup>」とか、「無思想」的「精神衰弱」<sup>3)</sup>とか、「二葉亭は文三の〈妄想〉にこそ『浮雲』の〈終り〉を困難にする主な要因があると認識していた」とかというように、否定的な解釈しか与えることができなかった。

しかし果たして、『浮雲』第三篇における文三は、それほど否定的な造型としか捉えられないのであろうか。しかし、『浮雲』第三篇は、二葉亭が当初計画していた構想とはずれてゆく方向へとたどったという意味において、より積極的な作者の意図を見出すことができるのではなからうか。本稿はこのような作者の意図と作品内容の相関に留意しながら、『浮雲』中絶という問題を追究してみたい。

## 二 『浮雲』第三篇の構想

——〈男女関係〉のありよう——

二葉亭が『都の花』に四回に渡って連載した『浮雲』第三篇

は、『くち葉集　ひとかごめ』の最後部分に書き残しているへ六つの構想案』と比べてみると、それとは異なる筋立をとっていることが注意される。すなわち、現存する『浮雲』第一九回までの筋立がへ六つの構想案』における第一九回までのそれと異なっているばかりでなく、その構想案には入っていない内容が現存の第三篇には叙述されている。たとえば第一六回で、文三が突然お勢に対する「認識」にたどり着くことを受けて、この

第一九回の前半部で、お勢や園田家の現状に関して文三なりの診断を下すといった展開は、へ六つの構想案では全く見当たらない箇所である。『浮雲』第三篇の中でも、この部分は、いわゆる語り手が「文三になりかわり、「語り手」のことは文三の独自に収斂されていく」、もしくは語り手が「文三と共犯関係を結ぶ」といった箇所として問題視されているところである。それゆえ、文三のへお勢に対する認識』やへ園田家の現状診断』が叙述されているこの部分は、『浮雲』の中絶問題を解き明かそうとする場合、見逃せないところだといえよう。

このように概観できるとすれば、『浮雲』の中でこの第一六回から第一九回にかけての筋立が占めている意味はどこにあるか。『浮雲』の中で、主人公の文三の心を捉えるとともに悩ませたものがお勢との愛であったという事実からもわかるように、『浮雲』という小説は、当時のへ言論界』をにぎわわせていた「男女交際論」というテーマが筋立の基本的な骨格をなしている。したがって本稿の課題とする筋立の問題も、このような「男女交際論」という観点からみると、そこにこそ『浮雲』の中で作家のもっとも批判的な意図がみとめられることに気づく。第

一九回で「今の家内の有様を見」ている文三（もしくは語り手）の判断を叙述したところに、

今の家内の有様を見れば（中略）見るも汚はしい私慾、貪婪、淫褻、不義、無情の塊で有る。以前人々の心を一致させた同情も無ければ、私心の垢を洗った愛念もなく、人々己一個の私をのみ思つて、己が自恣に物を言ひ、己が自恣に挙動ふ、欺いたり、欺かれたり、戲言に託して人の意を測つてみたり、二つ意味の有る言を云つてみたり、疑つてみたり、信じてみたり、いろいろなさまざまに不徳を尽くす。（一六九頁）

とあるが、文三が園田家のありさまに投げつけるまなざしはきわめて批判的である。その批判的な認識は、園田家にとどまらず、「お勢が（中略）醜穢と認めねばこそ、身を不潔な境に処きながら、それを何とも思はぬ顔色」という叙述が別に示しているように、お勢にも直接浴びせかけられてもいる。

文三がお勢や園田の家庭を「私欲と淫欲とが爍して出来した」「汚はしい」墮落に陥っていると激しく批判する理由を見出すことはそれほど困難なことではない。つまりそれは、「昇に狎れ親んでから」のお勢が「故の吾を亡くした」というところや、「淫褻」「不潔」という言葉が暗示するように、直接的にはお勢と本田昇の交際の仕方に起因するといえよう。というのは、文三がお勢に対して抱いた恋愛感情は、当時の言論界で議論されつつあった、前時代の男女関係とは弁別される精神的な交際方式を背景とするのに反して、お勢と本田昇の交際は、旧習にならず肉欲的な戯れに終始していると、文三には見えたからである。文三はそのような男女関係を「淫褻」「不潔」と断じ、墮落とみなしたのであった。

お勢は「昇を愛してゐるやうで、実は愛してはい」なかつたにもかかわらず、昇との「親しみ方が、文三の時とは、大きに違つて、只戯ぶれる計り、落ち着いて談話などした事更にない」といつた關係を続けている。文三は、そのような彼らの付き合い方を目撃し、「実に淫哇だ。叔母や本田は論ずるに足らんが、お勢が、品格々と口癖に云つてゐるお勢が、彼様な猥褻な席に連つてゐる。(中略)平生の持論は何処へ遣つた、何の爲めに學問をした」と断じているように、きわめて批判的に見つけていたが、ここで批判するお勢の「平生の持論」とは、「西洋主義」の眞の理解者だと彼女が自負していた事実を指しているともてよからう。

『浮雲』をへ恋愛」というテーマからみると、近代社会にふさわしい、新たな男女交際のありようを追い求めていた啓蒙家たちの間で、頻繁に論議されていた当時の「男女交際論」に関する問題がそのまま反映されている。その論議を要約すれば、男女の交際を「肉交」(肉体的交際)と「情交」(精神的交際)で類別し、「肉交」を以前の野蛮時代の交際方式であるとし、それゆえに、「情交」を文明開化時代の望ましい男女交際として積極的に推し薦めていた。この二組の男女關係の差異はそのまま、『浮雲』の中で恋愛を「愛」と呼んでいる文三の認識と、「色」と呼んでいる昇のそれとの距離を反映している。のみならず、この差異は、『浮雲』の中で「お勢を芸妓妓の如く弄」<sup>1)</sup>ぼうととする昇の肉欲的な交際と「相愛は相敬」<sup>2)</sup>することだと考える文三の精神的な交際の対立としても描かれているのである。まさに男女の交際における前近代／近代の対立として捉えられる。

しかし、ここで以上の事実とともに注意されるのは、この小説における語り手の視点のスタンスが、それまでの視点とは異なつて、お勢や園田家を激しく批判する文三に同化し一体化しているという点である。つまり、この第十六回と第一九回における語り手こそ、「文三になりかわり、「語り手」のことばは文三の独白に収斂されて」おり「文三と共犯關係を結」んでいるということになる。それをあらためて言えば、『浮雲』で語り手の視点の不安定さとは、作品世界の出来事が展開するにつれて、語り手の表現位置が次第に文三のほうに接近し、やがて同一化してゆくということである。

まず『浮雲』第一篇で、文三とお勢が互いに心が惹かれることで、近代的な「男女交際論」を話し合つていた時期には、語り手は文三を含め登場人物を対象化して、作品内の出来事を傍観者的に捕捉しており、すべての登場人物に対して等距離を保っている。しかし、文三が免職され、本田昇が登場するとともに、文三とお勢の關係が微妙になつてゆく第二篇に至ると、語り手の視点は、お勢との關係に不安を感じ、彼女の心を疑い始める文三に接近するようになり、文三の疑いを分かち合うようになる。たとえば、

凡そ相愛する二ツの心は、一体分身で孤立する者でもなく(中略)愉快適悦不平煩悶にも相感じ気が通じ心が心を喚起し決して齟齬し扞格する者で無いと今日が日まで文三は思つてゐたに、①今文三の痛痒をお勢の感ぜぬは如何したものだらう。

どうも気が知れぬ、②文三には平気で澄ましてゐるお勢の心意気が呑込めぬ。(八〇頁、番号と傍線は引用者)

という叙述がそのような語り手の位置をよく示している。こ

ではまず、文三が理想とする「恋愛観」を提示した後、愛する人の苦悩（「痛痒」）を理解しようとしないうお勢を、一方では文三の疑惑として、他方では語り手の判断として叙述している。

すなわち、①の個所は語り手の疑問の判断であるが、②の個所は語り手が文三の内面を写し出して表現している。したがって①と②の間にある「どうも気が知れぬ」という疑惑は一体、文三の内的独白なのか、文三の思いに同化した語り手の疑いなのか、判断できない。この引用文にうかがえるように、文三が考えている「平等で一心同体的な近代的愛」という文脈にもとづいてお勢に関する判断を語り手と文三が分かち合っているということは注意される。

第二篇の随所に見える、このような語り手の表現位置は、文三がお勢に見捨てられて以後になると、お勢と昇の付き合い方や園田家の有り様を墮落と決めつける前掲のごとき叙述に至っては、文三に同化し、語り手の視点はまったく文三の視線に重ねられてお勢と園田家の有り様をきわめて批判的に捉えてゆくことになる。

以上からわかるように、「くち葉集 ひとかごめ」の「六つの構想案」には見当たらない、いわゆる文三の「お勢に対する認識」と「園田家の診断」を示す『浮雲』第三篇の筋立は、文明改良的恋愛観にもとづいて、文三が「淫らな」雰囲気醸し出すお勢を「淫褻」「不潔」の状態に墮落していると批判し、また「娘の道心を絞殺そうとす」るお政などが醸し出す園田家の雰囲気をも「私慾、貪婪、淫褻、不義、無情の塊」だと罵倒する言説の集中する個所に当たるところであった。そしてこの筋立

こそが、作品の中での語り手と文三の距離を規制する。すなわち、文三とお勢の関係が次第に疎遠になるに従って語り手と文三の距離は限りなくせばまり、語り手はお勢に対する文三の苦悩や批判に共感するような様相を帯びるようになる。そのため結局のところ、語り手の表現位置が第一六、一九回のように、完全に文三に近づいて文三とともに批判的姿勢を見せるといえるのは、以上の状況からみると避けがたいことであつたともいえる。というのは、『浮雲』の「はしがき」で「文明の風改良の熱一度に寄せ来る」当時の時代的風潮の中で、「文章」をも改良させ「言文一途」にすべきだと考えていた作家が、語りの構造において新タイプの改良的ともいえるべき恋愛意識を志向する文三のほうに肯定的なスタンスを取るようになるというのも当然予想できるからである。

### 三 『浮雲』第三篇における作品世界の論理

#### — 作者の位置 —

以上に考察してきたとおり、『浮雲』の構想案には明瞭に輪郭化されていない文三の「お勢ならび園田家の診断」に関する小説叙述は、男女交際論における同時代的な価値基準から判断した場合、作品全体の中でも「旧習」にならずにいるお勢や昇に対する文三（もしくは語り手）の批判的なスタンスが突出している個所といえよう。しかもその個所は作者の社会風俗批判にとどまらず、意外にも作品世界に多大の問題性を呈している。その最大なものが作品世界の論理性の破綻である。

たとえば、第一九回で描かれているお勢の現状に関する語り

手の描写には、第一六回の説明と矛盾する個所があらわれてくるようなところがその典型であろう。すなわち、第一六回でお勢が文三を見捨てたのは「移気、開豁、軽躁」といった彼女の「天性氣質」のせいだ、というように理由付けされていた。それが第一九回になると、あらためて「昇に狎れ親んでから、お勢は故の吾を亡くした」とか、「お勢の眠った本心」という理由が示されることとなるのだが、それは第一六回の理由付けとは逆の捉え方なのである。というのは、お勢の「故の吾」や「本心」とは、文三を見捨て彼女自身が墮落する原因になった「移気、開豁、軽躁」といった彼女の「天性氣質」を指しているはずだが、ここでは、「故の吾」や「本心」を取り戻せば、現在の「不潔」な墮落から乗り越えることができると説明されているからである。

このように、『浮雲』の第三篇では、作品世界の論理性とかかわってさまざまな問題点が呈されている。第一九回の前半部のいわゆる〈園田家の診断〉に関する叙述もがその一端をはつきりとみせている。もっとも問題視されるのは次の文章である。

お政は昇の意（お勢と結婚まではいかに遊びのみしよとす心・引用者注）を見抜いて、昇も亦お政の意（お勢を昇と結婚させようとする心・引用者注）を見抜いて、故らも互に見抜れてゐると略ぼ心附いてゐる。それゆゑに、故らに無心な顔を作り、思慮の無い言を云ひ、瞞着しようとする力めあふものゝ、しかし、双方共力は牛角のしたゝかものゆゑ、優りもせず、劣りもせず、挑み疲れて今はすこし睨み合ひの姿となつた。総て此等の動静は文三も略ぼ察してゐる。それを察してゐるから、お勢がこのやうな危い境に身を処しながら、（中略）汚はしい家内の調子に乗せられて、何

心なく物を言つては高笑をする、その様子を見ると、手を束ねて安座してゐられなくなる。  
（二六九〜一七〇頁）

ここで文三は、園田家の実態を鋭く看破する人物として描かれるようになる。その観察力は、たんに家の内部にとどまらず、人間の内面、すなわちお政や昇やお勢の心の奥底までも見透かすこともできるのである。右の引用文で文三が園田家の実態を看破していると紹介されている事件は、作品内部では十一月八日以後、つまり第十六回以後の時点で展開されている。ところが、第十六回以後の文三は「用事が無ければ下へも降りて来ず、只一間にのみ垂れ籠めて」、お勢はもちろん、園田家の人々とは「此数週の間妄想でなければ言葉交へた事の無」かつた存在である。だから文三は、園田家に同居してはいても、他の登場人物とは何の関係も交わさない別天地の人物であつた。それにもかかわらず、文三は彼らの心の中に入り込んで、その内面の動きを精密に観察しうる「全知全能の視座」を持つ人物として、唐突に現れてくる。もしも本稿の筆者の分析が間違っているとすれば、おそらく文三は、第十九回で自分の判断材料を収集するために、絶えず階下の人物の対話をひそかに盗み聞きをしたり、その一挙手一投足を盗み見したり、あるいはその内心を記入した彼らのメモ帳のようなものを盗み見したりしなければならなかつたであろう。

このような人物造型の矛盾は、『浮雲』第三篇の枠内にとどまらず、前篇と照応させてみても、その破綻の一端を読みとることができるといえる。その代表的なケースが、やはり第一九回で「心を留めて見なくとも、今の家内の調子がむかしとは大に相違する

は文三にも解る」からで始まる個所である。

以前まだ文三が此調子を成す一つの要素で有つて、人々が眼を見合しては微笑し、幸福といはずして幸福を楽んでゐたところは家内全体に生温い春風が吹渡つたやうに、総て穩に、和いで、沈着いて、見る事聞く事が尽く自然に適つてゐたやうに思はれた。そのころの幸福は現在の幸福ではなくて、未來の幸福の影を羨しむ幸福で、我人も皆何か不足を感じながら、強ちにそれを足さうともせず(中略)そのころは人々の心が期せずして自ら一致し、同じ事を念ひ、同じ事を樂んで、強ちそれを匿さうともせず、また匿くすまいとせず。

(一六八頁)

ここに描かれている昇の登場以前の園田家の様子は、少なくとも、お勢とお政の關係に焦点を宛てると、実は第一篇の叙述とは矛盾する光景なのである。というのは、昇の登場以前までのこの作品の基本的な対立構造は、「是れ(お勢とお政の衝突・引用者注)はこれ辱なくも難有くも日本文明の一原素ともなるべき新主義と時代後れの旧主義と衝突する所、よくお眼を止めて御覽あらませう」という叙述が示しているように、お勢とお政の新旧の対立だったからである。實際、この期間におけるお勢は自分を「西洋主義」の本當の理解者だと自負し、自分の交友や下女の鍋はいうまでもなく、母親のお政にまで近代(西欧)的に目覚めていない人物として見下ろし輕視していた。

母親のお政に対するお勢のまなざしといえ、母ですか、母はどうせ下等の人物ですから」とか、「あれは母親さんの方が不条理ですワ。(中略)教育の無い者は仕様が無いのネー」という彼女の言葉からでも明らかである。このようなお勢の態度によつて、母娘が一緒にいる場所ではいつも衝突が絶えない。

「な、な、な、なんだと、何とお言ひだ……コレお勢、それはお前、あんまりと言ふもんだ、餘り親をば、ば、ば、馬鹿にすると言ふもんだ。」

「ば、ば、ば、馬鹿にはしません。へー私は條理のある所を主張するので御座います。」ト唇を反らしていふを聞くや否やお政は忽ち顔色を変へて、手に持つてゐた長羅宇の煙管を席へ放り付け、「エーくやしい。」ト齒を喰ひ切つて口惜しがる。(五一〜五二頁)

その零團氣の一端は、右の引用文を通して感じ取ることができよう。だから第一九回の語り手が、この「以前」の園田家の様子について、「家内全体に生温い春風が吹渡つた」とか、また「総て穩に、和いで、沈着いて」いたとか、あるいは「皆何か不足を感じながら、強ちにそれを足さうともせず」「自ら一致し、同じ事を念ひ、同じ事を樂んで」いたと判断し總括する叙述に出会ふとき、読者は第一篇の物語の展開との齟齬にたじろがざるをえないことになる。かえつて、作品の前半部におけるお勢とお政の關係は、「和いで、沈着いて」いたり、「自ら一致し」たりしたという叙述とは多大の距離のあるプロットとして設定されていた。その二人の關係性とは、二葉亭が「新思想と旧思想」の対立を活写しようとしたという意図からわかるように、「新主義と旧主義」の対立といった、役割を担つたプロットだったのである。

だとすれば、作品世界の論理性がこのように崩れてしまつた理由はどこにあるのであろうか。その理由は、文三とお勢の「愛」という關係が文三の戀愛觀にそつてうまうまいった時には「家内全体に生温い春風が吹渡つたやうに、総て穩に、和いで、沈着いて」いたというように、昇とお勢が肉欲的な交際が続く第一

九回以後の現在では、「私慾、貪婪、淫褻、不義、無情の塊」に陥ったという叙述から知られるように、作品世界は一挙に、文三／園田家という対立構造に対して、〈近代的男女関係〉という基準にもとづく善／悪という価値観を結びつけようとする語り手の言説の変換が起ったからである。そこに作品世界の破綻の一次的な理由が潜んでいる。しかもその変換にともなう、文明改良的な「知識」と「学問」を所有している文三にこの小説の全知の語り手が接近することで、文三の見たことも、聞いたこともない、または経験したことがないことを、「文三にも解る」「文三も略ぼ察してゐる」という造型に変換せざるをえなくなつたのである。その結果が園田家の実態やお勢の心の内部を洞察する人物としての文三の再設定であつたわけである。

この語り手の言説の変換・登場人物の造型の再設定においては、むしろ一貫した論理の体系が成立しているとみてもよからう。すなわち、男女関係のありようを通して園田家の現状を弁えようとする作意が作品世界の筋立や人物造型の一貫性を圧倒してしまつたのである。その底流には、たとえ作品世界の論理性を傷つけるとしても、作品世界の中に、男女関係によつて表象される近代的思想を価値基準とし、それに即するかたちで登場人物の〈善〉と〈悪〉の対立を示そうとする作意の要請が潜んでいた。

#### 四 『浮雲』第三篇の行き詰まり

##### — 小説化論理の崩壊 —

『浮雲』の中で、文三の〈お勢や園田家の診断〉を示す第一

六回、第一九回は、これまでみてきたように、登場人物の思惟、行動を善／悪の対立として弁えて描かれている。とりわけ文三の場合は、作品世界の中で語り手のこの意志を分かちあえるところの、唯一の目覚めた人物として再設定されることとなつた。そのために、文三の視線からすれば、お勢を始めとする他の人物は、墮落した、憎むべきもしくは救われるべき人物像として捉え返されているのである。このような作品構造の変換は、登場人物と関わる修飾語が作者の価値評価を告示する側面からもうかがうことができる。

ただ、このような価値判断の介入は実際、二葉亭の文学論とは齟齬する結果を往々にもたらすことになる。『浮雲』第三篇の冒頭部分である第一三回、第一四回、第一五回が『都の花』に掲載される何日か前に、二葉亭は『落葉のはきよせ 二籠め』に次のように記している。

さるからに小説を作らむにもまたまづ私意を去らむにはしかず(中略)たゞ心を正して有の儘に事物の真を写さんとのみつとむへし。作者の識力をあらはさむとて小説の人物を愛しもし憎みもせば偏執の氣自ら筆下に濺りてみよくもあらぬものぞ。此事をわする間はいかにつとめはけむともよきものは作り得べくもあらず

この言説では、小説を書くときには、作家の個人的な主観を抑え、「物事の真」をありのままに描くべきだと強調している。さらに、そうするためには作家が小説に登場する人物に対して客観的な態度をとるべきだとも提起している。というのは、もしも作家が作中の人物に対し愛憎の判断を下せば、作家の物事に関する価値判断力が作品世界を裁いてしまうからだという

である。二葉亭は、このように作中人物に作家の善悪の判断を  
はさみ込み、「作者の識力」(価値判断)が現れた作品を出来損  
ないとしてみなしていた。

だが『浮雲』の後半部は、これまでに論じてきたように、文  
三の考え方や園田家の人々や昇の行為を善／悪、文明／墮落と  
いう図式でとらえ返すことで、「作者の識力」を表わしてしまっ  
た。その結果、みずからの理論に背反する小説を産み出してし  
まったのである。『浮雲』第三篇におけるこのような結果が、作  
者の論理・思想が作品世界の論理性を凌駕してしまつたという  
事実と深く結び付いていることは、前節で指摘したとおりであ  
る。

ところで、このような論理矛盾を惹き起こしてしまつたとい  
うことは、二葉亭の模写論を揺さぶることもつながる深刻な  
問題を露呈してしまつた。二葉亭の文学論、特にその文学論の  
根幹になっている模写論(『写実論』は、「形」(form)と「意」  
(idea)、「実相」と「虚相」、もしくは「現象」と「真理」のよ  
うな、二元的なパターンから成り立っていることが大きな特徴  
となっている。この二元的なパターンというのは、この世界に  
おけるリアリティーとは何かといった、問いに直接に結びつい  
ていることであつた。というのは、たとえば「此偶然の形の中  
に明白に自然の意を写し出さんこと、是れ模写小説の目的とす  
る所なり」とか、「模写といへることは実相を仮りて虚相を写し  
出すといふことなり」、あるいは「リアリチイとは現象に形はれ  
たる真理をいふ也」という言説がそのことを物語っているから  
である。すなわち、模写を行なうに際して、前者の場合はリア

ルな対象に入りこむための通路として、後者は小説家が最終的  
に写し出さねばならない模写における真の対象として各々位置  
している。

だとすれば、作品の創作に際して、作者は現実の物事(「形」  
から抽出した真理(「意」)をどのように表現することができる  
のであろうか。言い換えれば、二葉亭にとって作品の創作過程  
とはいかにしてたどり着くことができる作業なのであろうか。  
二葉亭には、作品の創作過程ということもやはり、「形」と「意」  
の間に考案されるべき問題であつた。というのは、芸術家が「無  
形の意を、只一の感動(インスピレーション)に由つて感得し、  
之に唱歌といへる形を付して、尋常の人にも容易に感得し得ら  
るゝやうになせしは、是れ美術の功なり」という説明に見える  
ように、小説創作を含めた芸術創作とは、創作主体が現実から  
探り出した「意」に「形」を賦与する行為だとされているから  
である。この考え方は、「之(作者が表そうとする理想…引用者  
注)を活かして小説にあらはさんとなればまづ相当の形を賦せ  
ざる可らず」という言説にもよく表われているといえる。

結局、このように二葉亭にとって芸術を創作するという行為、  
具体的には小説作品を書くという行為は、作者自身が生きてい  
る現実世界(「現象」)を観察・解剖し、その裏面にある本質的  
な観念(「真理」)を見つけ出すことであり、そしてその現実の  
中から得た抽象的な観念(「真理」)をあらためて現実形態(「現  
象」)に再構成するといふように、その観念にふさわしい「形」  
を賦与することであつた。二葉亭にとって、『浮雲』の創作時に  
も、このような創作過程がとられていたことは次の引用文がよ

くうかがわせている。

『浮雲』には(中略)いきなりモデルを見附けてこいつは面白いといふやうなのでは勿論無い。さうぢやなくて、自分の頭に、当時の日本の青年男女の傾向をぼんやりと抽象的に有つてゐて、それを具体化して行くには、どういふ風の形を取つたらよからうか。というろく工夫をする場合に、誰か余所で会つた人とか、自分の予て知つて者とかの中で、稍々自分の有つて抽象的の觀念に脈の通ふやうな人があるのだ。するとその人を先づ土台にしてタイプに仕上げろ。勿論、その人の個性はあるが、それを捨て、了つて、その人を純化してタイプにして行くと、タイプはノーションぢやなくて、具體的のものだから、それ、最初の目的が達せられるといふ訳だ。

これは、『浮雲』における登場人物の造型方法に関する言説であるが、ここにも作家が表現しようとする「抽象的觀念」(「意」)をどのようにして具体的な形象(「形」)として表すかという、過程を記述している。『浮雲』には、このように登場人物の造型化にとつても、「意に形を付する」といった意識が働いていたことがわかる。その一方で、それとともに小説の創作時、現実の現象から見つけた「意」というのは、その作品に対する作家の中心思想、もしくは主題意識となると言うことができる。というのは、右の引用文での「抽象的觀念」(「意」というのは、二葉亭が『浮雲』に描き出そうとする作意にはかならないからである。

しかし、『浮雲』の第一六回と第一九回で、作品世界の論理性という観点からすると、作意を表すための「形の賦与」がうまくいかなかつたということ、創作の原理である「現象から本質を抽出すること、その本質をふたたび現実に還元すること」

といった、基本的なダイナミズムからの逸脱を意味することはいうまでもなからう。その逸脱こそまさに彼の「美術」(芸術)に関する理論の崩壊を招くことでもあつた。

二葉亭は、「小説総論」で「形」の中から「意」を穿鑿しようとする性質を二分類し、一方で「智識を以て理會する学問上の穿鑿」があり、もう一方では「感情を以て感得する美術上の穿鑿」があると述べている。さらに彼は、「清元」と「常磐津」に譬えた美術は「無形の意を、只一の感動(インスピレーション)に由つて感得し、之に唱歌といへる形を付」するものだといった時、芸術とは「意」(本質)を「形」(形象)へと変容させる創造的な作業だということは、すでに前で見たとおりである。

二葉亭のこの考え方は、『浮雲』第二篇を発表した明治二十一年、『国民之友』に訳出した「學術と美術の差別」にも表れてくる。ここでは、美術を學術と結びつけて「凡そ學術は物を変じて意思となし、美術は意思を變じて物となす。學術は實在の物を変じて虚靈の物となし、美術は虚靈の物を変じて實在の物となす。」というように言説化している。

だが『浮雲』第三篇においては、作品世界に「作者の識力」がその論理性を超えてまで横溢しているという事実は、この基本的な理論を裏切つて、『浮雲』第三篇が執筆されていったことの反証ともなる。『浮雲』第三編は「形の賦与」をはるかに超えて、「二二」が四(「小説総論」だという学問(智識)の言説のように、作者の論理(智識)がそのまま表白されてしまつた。その結果として、芸術の一種としての文学作品は、「形」としての作品を読む読者の「感情の下に働き、其人の感動(イ

ンスピレーション)を喚起し、かくて人の扶助を待たずして自ら能く(作品の作意を…引用者注)説明」できるものであるが、作者によつて「形の賦与」がうまくできなかった『浮雲』第三篇は、二葉亭の模写理論の崩壊という危機的な状況に立ち至つてしまつたといえよう。

## 五 『浮雲』第三篇における〈作意〉の表白

### — 作品の啓蒙性 —

『浮雲』第三篇、とりわけ文三のへお勢に対する認識とへ園田家の診断」という筋立において、二葉亭が理論として提示した「形」と「意」の調和を崩壊させ、そのために作意に自己の価値判断をあらさまにしてみましたことに對し、二葉亭は芸術(文学)に對する自己の才能が足りないといふ捉えるようになっていった。というのは、二葉亭が『浮雲』の第三篇を書き終える頃に書いた『落葉のはきよせ 二籠め』に、實際そのような述懐をもらす、数多い言説に出会うことができるからである。そのなかでも、次のようなへ形(Form)に関する理論に引き付けての述懐が目される。

つくつくと小説家の性質を解剖するに多くは想像にとめるが如し、若し想像に事欠くときは実は面白き理想なるも之を發揮して愉快なること能はず 人物とてもその通り 例へば我國民の長所も短所も悉く知り尽したればとて之を活かして小説にあらはさんとすればまづ相当の形を賦せざる可らず、相当の形を賦せんとすれば日常瑣末の事も一々心に記しおきてさて必要ある毎に之をつかはさるべからず、しかせんには平生の注意もまた用ひ方人に異ならさるべからず是やうのことわか能くたふる事なるへきか 是れわか小説家たるべ

からさる第一の理由なり

(『落葉のはきよせ 二籠め』)

二葉亭はここで、小説を創作するに際しては想像力が不可欠であると云つてゐる。しかし、ただそのような「理想」、つまり作家の描き出そうとするところの「意」を持つてゐるといつても、想像力によつてそれにふさわしい「形」を賦与することがうまくいかねばならないという。このような理論をふまえてみずからをふり返る二葉亭は、これまでの創作の過程で、「理想」にもとづく「意」にふさわしい「形」を賦与することができないと感じ、自分は小説家として充分な資格をもつていないと痛感してゐるのである。實際右の引用文は、明治二年六月二四日に書かれた部分であるが、それに照応するかのようにな、七月一〇日の日記には、同月七日に『都の花』(第十八号)に載せられた第一三、一四、一五回の連載が「殆ど読むにたへぬまでなり」と言つて、小説に對する能力の不足に苦しんでゐる。

二葉亭が、このような問題に悩んでゐたといふことは、たんに小説の形式のみならず、小説叙述の問題にも及んで深刻であつた。そのレベルの問題についても『落葉のはきよせ 二籠め』に、

句を作ることも余は拙けれど取分けて不足なりと思ふは結構の材なり、偶々我ながら妙なりとおもふ意思を得てこれを旨意に一の文章を草せんと筆を執れば何事よりか書起さんかと迷ひ既に之を得て之を書き尽せば、その次は如何やうに書き尽(続)けんかとおもひ屈し出来上りたるをみれば始め心に浮びたるとは全く遠ひて呆きれて筆を投ずることも往々有り

とある言説にもみとめられる。これによれば、小説に描き出そうとする「意思」(『意』)を持つてゐても、小説叙述、すな

わち「句を作る」才能や、「結構」（叙述構成）の才能に恵まれていないから、出来上がったものを見ると、始めに考えた「意思」とは異なるものになってしまうと嘆いている。このように二葉亭は、『浮雲』第三篇を書き終える頃には、小説の創作をめぐる形式・叙述・内容にわたって心が激しく動揺していた。

ところがここで興味を惹くのは、二葉亭が「形」や「結構」や「句法字法」の問題を取り上げる際に、必ずその基準を持っているということである。言い換えれば、二葉亭にとつて小説を描き出すという行為は、自身が抱いている「理想」「意思」といった、「作意」を忠実に実現することができるかどうかということであった。

現存する『浮雲』第三篇は、このような二葉亭自身が抱いていた創作の理論とは次第に距離が生じるようになって来た出来損ないと気づいていたにもかかわらず、『浮雲』第二篇の創作後に準備していた、いわば「六つの構想案」とは異なる方向へと一挙に進んでいった。すなわち、現存の第一六回と第一九回にみえる文三の「お勢の認識」と「園田家の診断」を書き進めていった。そしてそれが孕む問題は前節までで言及したとおりである。しかしその個所はあらためてみると、文三が近代的恋愛という立場から、お勢を含め園田家に対する強い批判を口にするところであつて、文三の啓蒙意識が見出せるところでもある。

実際、第一六回と第一九回のこの部分に対し、先行論では文三の「お勢へ抱く期待が妄想」<sup>(16)</sup>だったというような判断が多く下されている。だが、この部分を『浮雲』の出来事を中心軸をなしている「男女交際論」という側面から捉え返すと、文三が

第一六回と第一九回で見せている判断・批判は決して「妄想」とは言い切れないのである。それは当時の啓蒙家によつて唱えられていた近代的（西欧的）な思想であり、倫理観である。つまり、文三という人物はここにおいてその体現者だったともいえる。それゆえ、文三はお勢との破局を乗り越えて、あらためてお勢と園田家を前近代的迷蒙から救済するために、お勢の眼を覚まそうとするのである。お勢は、文三の判断したとおり、本田昇との交際が始まると、「身を不潔な境に処きながら」様々の醜態を演ずるようになる。ここに至つてのお勢の姿からは、以前文三から影響を受け、近代的な恋愛観に目覚めたようにみえたのも、ただの一次的な気まぐれにすぎなかつたことがうかがえる。お勢にとつて、明治初期に受容された西欧近代の思想と観念は、表層的なものとして受けとめられたにすぎなかつたともいえよう。

文三の判断や小説叙述からすると、作品の後半部のお勢の墮落した状態は「故の吾を亡くして」、「理性の口を閉じ、認識の眼を眩ませて」、「本心が眠つて」いるからである。文三は、このように判断するからこそ、お勢を救う方法として「お勢の眠つた本心」や「底の認識まで届かないお勢の眼」を「覚まさなければならぬ」としばしば口にする。それゆえ、お勢の墮落の原因は、狭くは近代的な恋愛観、広くは当時の新思想を充分に消化し切れないでいる、過渡的な時代の所産に帰することもできる。

それに対応するように、立ち現れたのが文三の啓蒙意識であつた。<sup>(18)</sup>その意識の表れがお勢の閉じられた理性を開き、眩ませ

られている認識の目をも覚まそうとする口調なのだ。前節で考察したように、文三がお勢と園田家が「汚らわしい私欲と淫欲」に満ちていると判断した基準は、当時啓蒙家の思想の反映とみてよからう。だからこそ、文三は「危い境を放心して」いるお勢を「今が浮沈の潮界、尤も大切な時」として受け止め、自身がお勢と園田家を迷妄から救おうとするのである。このような文三の啓蒙意識を表す、いまひとつの事実は、文三だけが豊かで深い近代の文明改良的「学問」や「知識」を持っているゆえに、彼こそ唯一正しい「認識」の持ち主であり、お勢を救う担い手になりうるという確信の言説が現れてくることである。

文三が免職される以前は、文三とお勢はともにこのような近代的（西洋的）な恋愛観で自分たちを啓蒙しようとする自覚していた。だが、それを実践として受け入れようとはしないお勢は、本田昇とともに、啓蒙的なまなざしからすれば、醜悪な旧習になぞむ色恋いという関係に身を沈めてゆく。しかしその一方で、お勢に対する啓蒙家としての「義理」という義務感から、お勢や園田家を見捨てて立ち去ることもできなかった。このようにみれば、文三の判断や救済意識は、決して「妄想」ではなく、園田家に表象される明治初期の過渡的な社会に対する批判そのものなのである。

しかも、このような判断は、作品世界内の文三にとどまらない。というよりも、むしろ強引に文三の観念「善」、他人物の行為「墮落・悪」という図式として「作者の識力」を表そうとした結果にほかならない。第一六回から第一九回への文三の変貌には、確かに「作者の識力」を表そうとした（作者からの接近）

が仕掛けられているといえるだろう。その根拠になるのが実は、語り手がみずからの善悪の判断を自分の声としてでなく、文三の判断として語らせるために、作品世界の論理性まで破綻させている部分なのである。このことよって、「浮雲」の第一六回と第一九回は、たんに作品世界の論理性の破綻のみならず、二葉亭のもつ小説理論とも食い違う結果になってしまったわけである。

もちろん、「浮雲」第三篇の冒頭部に当る第一三、一四、一五回はある程度までは、「くち葉集 ひとかごめ」に書き込んで置いた構想案どおりに達成されているともいえる。だが、文学理論や作品世界の論理性を破綻させていると気づいたにもかかわらず、その「構想案」の示す方向から、いきなり文三の「お勢の認識」や「園田家の診断」を示すプロットへと押し進めたのはどうしてだろうか。思うに、二葉亭は作品の論理性が崩れることで、「形の賦与」がうまくいかなくとも、あえて自分が考えている作意を表すために、構想案と異なるところにまで書き進めたということ自体がその理由を代弁しているのではなからうか。作者の立場からすると、作者にとつての決着とは、近代を表象する文三と旧習になぞむ他の人物を善悪で弁別し、それゆえに文三はお勢を救わねばならないという啓蒙性と、どうしても結びつけねばならなかった。そこに、二葉亭にとつては真の主題の発見があつたかもしれない。

二葉亭は、このようにして「作者の識力」を表してしまつた以上、以後の部分を書き続けることには意味がないということがわかつていたであろう。なぜならば、すでに「浮雲」第一九

回で自身の抱懐する文学論と食い違ふかたちで、「形の賦与」がうまくいかなくとも、〈お勢や園田家の現状診断〉の個所のように「作者の識力」(価値判断)や作意を表現してしまつたからには、もはや自分の文学論に照らして新たにその作意に「形を賦与」し続けるということはあり得ないからである。ここにこそ、『浮雲』の中絶の理由があるといえよう。このような二葉亭の考えは、『落葉のはきよせ 二籠め』における「かうひしく」とおもひつめる事の起りを惟みるにこれは全く浮雲第一九回をかきこぢらしたる(に)よれるなるべし」という言説からうかがうことができる。この言説からは、『浮雲』の創作が構想案とは異なる方向に進んだ事情と、第一九回までの創作が書き誤つたと自覚したところで終わらせたという事情が読みとれる。その終わりとは、『都の花』で『浮雲』第十九回が終わつたところに「終」と記されているそのものが象徴的に物語っているといえよう。<sup>(19)</sup>

## 六 むすび

『浮雲』第三篇における文三の思惟、もしくは語り手の言説は、〈園田家やお勢の現状〉に関する価値判断を濃厚に見せている。しかしその価値判断とは、先行論で議論されてきたような、「文三の妄想」とか、「作者の歪みと動搖の象徴」、あるいは文三の「無思想」ないし「精神衰弱」を表すと断じえない。実際、『浮雲』の世界造型に多くの側面で影響を及ぼした『女学雑誌』、その中でも「男女交際論」(第一―第七)や「日本の家族」(第一―第七)<sup>(20)</sup>などの記事から逆照射すると、第一六回と第一九回

の内容が偶然とは思えないほど、その記事の論旨と深い関係のあることが確かめられる。ところでその記事の論調は、『浮雲』の第三篇で分析したとおり、文明改良の意識のもとに西欧の様式にもとづいて〈男女交際〉や〈家庭〉のありようを追い求めようとした啓蒙的態度であつた。

『浮雲』の中絶という問題が考察されるようになったのは、二葉亭の雑記帳の発見、特にその中で『浮雲』第三篇の〈六つ の構想案〉の発見が契機となつている。本稿はその考察を試みたものである。『浮雲』の後半部は、惜しくも作品世界の論理性と構造に亀裂が生じ、作者の抱懐した文学論の破綻の危機までもたらしてしまつた。それによつて、日本の近代文学の先駆けであつた『浮雲』が惜しくも中絶してしまつたということは、まぎれもない文学史的事実であつた。しかしあらためて言えば、この中絶によつて、『浮雲』第三篇は「国民の気質風俗志向を写し国家の大勢を描き」、「瑣事にあらず」、また「いやしくもない小説」を書き尽くしたといつてよからう。それによつて二葉亭は、単なる「文章家」にとどまらない、彼自身が抱懐する真の「小説家」になり得たのである。

### 【注】

本稿に引用したテキストは、『二葉亭四迷全集 第一卷』の『浮雲』(筑摩書房、一九八四)による。『浮雲』からの引用は、頁数のみを付すことにする。なお、引用文の中で、旧字体の漢字は新字体に改めた。

(一) 小森陽一「物語の展開と頓挫―『浮雲』の中絶と〈語り〉の宿命―」(小森陽一『構造としての語り』、新曜社、一九九四)一六五頁。ここで、「構想論」作家論、作中人物論、文体論」という立場で、『浮雲』中絶に関

する先行論が整然とまとめられている。

(2) 畑有三「二葉亭のきりひらいたもの」(『国文学 解釈と鑑賞』、一九八〇年一月) 九三頁

(3) 松田道雄「浮雲」について(『文学』、岩波書店、一九五九年二月) 六八―六九頁

(4) 小森 前掲論文二〇九頁

(5) この〈構想案〉は各々その内容を少しずつ異にしてはいるが、比較的にまとめられている二番目と六番目の構想案をみると、評論せし夕昇来りし時のお勢のさま(文三の後悔)お勢にはちかるること(お勢の昇に親しむさま)編物の稽古の帰りに(文三お勢に忠告せんとして忠告しかぬる事)のように、現存する「浮雲」第三篇の第一三回、第一四回、第一五回、第一七回、第一八回、第一九回の後半部の物語はほぼ構想案と一致している。だが、文三のお勢および園田家に関する診断を明示するところは見当たらない。

(6) 小森陽一「葛藤体としての〈語り〉―「浮雲」の地の文―」(前掲書) 一一三頁

(7) 十川信介「浮雲」の世界(十川信介「増補二葉亭四迷論」、筑摩書房、一九八四) 一〇八頁

(8) 「浮雲」第二回と第三回に文三とお勢が「男女交際の得失」、「男女交際の論」に関して論じたという叙述がある。当時の「男女交際の論」に関する記事は「時事新報」と「女学雑誌」などに見られるが、とりわけ「浮雲」と関連して関心を惹くのは「女学雑誌」のほうである。というのは、「浮雲」の第六回でお勢がこの「女学雑誌」を購読している文章が出ているのみならず、落葉のはきよせ「二籠め」の明治二年六月二六日付の日記をみると、二葉亭もこの「女学雑誌」を購読していたという事実と、それが小説の材料にもなりうるという文章が見られるからである。

(9) 高田知波は、「浮雲」「二葉亭四迷」お勢試論(三好行雄編「日本の近代小説」、東京大学出版会、一九八六)で、「配偶者選択の自由」に重点を置きながら、お勢のほうに「男女交際の論と婚姻論」の分野で「西洋主義」を実践しようとした反面、文三は「当時の啓蒙的婚姻論の圏外に立ち、実践的には「お勢を呉れる」お政の「默契」に便乗しようとし」と指摘し

ている。だが、「お勢の心一ツで進退去就を決しようとする文三の考えを考慮すれば、文三が「お勢を呉れる」かどうかというお政の意志より、實際の対象であるお勢の決定権をもっと重きを置いている。それゆえ、作品の前半部における文三はお勢とともに、藤井淑慎(浮雲の四年間)―流行世相の推移を軸に―、東海学園国語国文」第18号、一九八〇年九月)が指摘するように、「当事者本位の自由な交際から結婚へと発展」しようとしたケースだといえる。一方お勢が、作品の後半部で本田昇を眞の恋人として受け入れる前に彼と肉体的な戯れに始終している様子を見れば、配偶者選択の自由を眞剣に取り組んだというより、彼女が一時主張した西洋主義」がいかに表層的であったかをよく示しているといえよう。

(10) 「女学雑誌」の「男女交際の論(第三)」「(一四号)」という記事によれば、「情交」「肉交」という言葉を初めて使用したのは「時事新報」だという。一方、「婦人の地位」(『女学雑誌』、二号)では、「男女交際の三段階(色の時代」「癡の時代」「愛の時代)」を提示しているが、「色の時代」は野蠻の時代に、「愛の時代」は「開化の時代」に該当すると述べている。この「男女交際の(恋愛論)の立場から「浮雲」の題意の問題を取り扱った拙稿「二葉亭四迷の「浮雲」論(『浮雲』という題意の問題をめぐって)」、(『文学研究論集』、筑波大学比較・理論文学会、一九九八) 参考

(11) 「男女の関係を」を表すに際して、文三と本田昇は対照的な言葉を使い分けている。すなわち、第一回と第十回で、本田昇は文三とお勢の関係を指して「情婦」「情夫」と呼んでいるが、文三の場合はいつも「愛」という言葉を使っている。「浮雲」に関連させて、この「愛」と「色」に関する論文には、佐伯順子の「色」と「愛」の間で「二葉亭四迷」(佐伯順子「色」と「愛」の比較文化史」、岩波書店、一九九八) などがある。

(12) 二葉亭四迷「作家苦心談」(前掲書、第四卷、一九八五) 一一二頁

(13) 二葉亭四迷「子が半生の懺悔」(前掲書) 二九〇頁

(14) 十川、前掲論文 一一五頁

(15) 二葉亭四迷「學術と美術の差別」(前掲書) 二二―二三頁

(16) 岡部隆志「浮雲」論(終わり)の不在(『文学研究』、明治大学文学研究会、一九九〇年二月) 三九頁

(17) 第一篇でお勢が近代的恋愛観に目覚めたように見せかけたところは、

自分は「西洋主義」の本当の理解者であることで、「男女同権」に対して言及し、そして西洋主義の理解者だと信じた友人たちが「両親に圧制せられて、みんなお嫁に往ったりお婿を取ったりして仕舞った」という前近代的な男女関係(旧習)を批判し、自分は「二千年来の習慣を破る」と文三に言いかける部分から知られる。

(18) 越智治雄は第二回で「或一日お勢の何時になく眼鏡を外して頸巾取っているを怪むで文三が尋ねれば「それでも貴君が健康なものには却て害になると仰つたものヲ」という叙述を根拠にして、文三を「お勢のいわば啓蒙家でもある」(『浮雲のゆくえ』日本文学研究資料刊行会編『坪内逍遙・二葉亭四迷、有精堂、一九七九、二二三頁』)と指摘しているが、そのほかにも、文三がお勢から自身の部屋に誘われたとき、お勢一人でいる部屋にはいることをためらっている、お勢は「貴君にも似合はない……：アノ何時か、気が弱くツチャア主義の実行は到底覚束ないと仰しやつたのは何人だツけ」という。この箇所でもやはり、文三がお勢に対して新たな考え方を言い聞かせる啓蒙家的役割を果たしていることがわかる。したがって、この文三の「お勢と園田家の現状診断」を表す視線にうかがえる文三の「啓蒙意識」はその延長線上に位置する。

(19) それゆえ、『浮雲』第三編での「(終)」という表示は、『浮雲』第三編の内容上からすれば、『都の花』の他人の作品が完成されたときに「終」と標されている編集意図と同様の意味をも示しているのである。

(20) 「男女交際論」(第一)〔第七〕(『女学雑誌』第百十二号)〔第百十九号、明治二二年六月二日〕明治二十一年七月二十一日、「日本の家族」(第一)〔第七〕(『女学雑誌』第九六号)〔第百二号、明治二二年二月十一日〕明治二十一年三月二十四日) 参考

(ジヨン) ピヨホン

筑波大学大学院博士課程 文芸・言語研究科 文学専攻)